

顎顔面形態の差が心理的背景に及ぼす影響に関する 検証

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 孝和, 小林, 容子, 御代出, 三津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/1132

2-T-10

顎顔面形態の差が心理的背景に及ぼす影響に関する検証

八木孝和¹⁾小林容子¹⁾ 御代出三津子¹⁾

矯正歯科治療（主に歯並びや口元のひずみを改善する治療）を希望する患者の目的は、歯並びだけでなく、噛み合わせ、顎の違和感、見た目等、多岐にわたる。形態や機能面に関する標準的なデータは人種間や年齢別に示されている。しかし、自身のボディイメージに対する矯正歯科治療を行うための心理的背景を十分に反映する基準を持たない。本研究では一般健常者の歯列・顎顔面形態ならびに顎顔面領域の機能と心理評価との関連性を明らかにすることを目的とした。

方法：顔面に先天的な障害がない18歳以上70歳未満で、歯を20本以上有し、現在、歯科治療中でない健常者ボランティアに、①顎関節の病状、咬合状態および歯周・う蝕等の歯科健診と、②顎顔面心理テストシートを用いて、抑うつ度、不安特性、幸福度を評価した。

（倫理承認番号：神常短研倫第19-5号）

結果：除外基準を除いた26名が調査対象となり、Angle Class Iを示す者が21名、Class IIが4名、ならびにClass IIIが1名であった。また、歯並びなどの歯列に不安を有する者が9名、顎関節に不安を有する者が3名、両方に不安を有する者が3名であった。心理面においては、顎関節並びに咬合に悩みを有する場合、その他の群にと比べて、特性不安が高く、身体的・環境的な幸福度は低下傾向を示した。

考察：一般健常者においても状態不安などを示す場合は、咬合に何らかの問題を抱えている可能性が示唆された。

1) 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科